



「幅の広いハイウェイや緑豊かな郊外でFM音楽を聴きながらのドライブは、日本の日常生活では味わえない豪華さを感じさせてくれた」(筆者談)



## 愛車? 「マーキュリー・セーブル」

武者 陵司

ドイツ証券 副会長兼チーフ・インベストメント・オフィサー

1988年わが家族は期待に胸を膨らませてアメリカ、ニューヨークの郊外、ニュージャージー州のミッドランドパークという小村に居を構えた。左上の写真は早速購入した米国産車マーキュリーのセーブル(フォードトラスの同型車)のステーションワゴンが届いた時、家族4人で撮ったモノである。米国車ながらヨーロッパ

ンスタイルの丸みを帯びたボディは、新鮮で高級感があった。ワゴン部分にある折り畳み式のいすを立てれば7人乗りにもなり子どもたちは大喜び、小旅行にも便利であった。バージニア方面、ワシントン・ウイリアムスバーグ、ボルティモアやボストン・メイン州方面、ペンシルベニア州ポcono山地やバーモント州のスキー場、カナダ旅行など、

北米大陸東部はほとんどこの愛車で出かけた。当時の在米日本人のほとんどは故障がなく中古車価格が高い日本車に乗っていた。私が米国車を購入したのは、「郷に入っては郷に従え」、やはりアメリカ暮らしをするからには米国製で考えたからである。それまで『純ドメ』で、34歳になるまでほとんど海外に関わることなく、欧米人を見て「毛唐」というようなそれまでの自分の品のない国粋主義に恥じ入っていたということもあった。自動車やエレクトロニクスという国際商品を担当するアナリストとなり、米国と米

国製品に対する無知を思い知らされていたのである。その反動から車は米国車、子どもは現地の学校、住宅も日本人が少ない離れた郊外と、努めてアメリカに深く沈み込もうとした。

しかしより強烈な思い出は、この愛車の信じた重大故障が買ってしまったまま立って続けに起こったことである。一度はパワーステアリングのシャフトが折れ、突然ハンドルが動かなくなった。子ども2人乗せて近所をドライブ中であったワイフは、やっとのことで路肩に寄せ止めたと言っている。このことを日本出張中の神戸で、電話で聞き戦慄した。続いて起きたのはパワーステアリングの故障

障。それも高速運転中であつた。その時は家族を乗せて私が運転中で、まさに絶体絶命であつた。さらに電気系統やお決まりのラジエーターの破損など、まあ故障のデパートのような車であつた。前二者の瀕死の事故は鋳物部品が折れてしまったことが原因という、信じがたい事故であつた。救いはそうした場面に遭遇した時、いつも予期しないアメリカの人たちの親切と手助けがあり、何とか困難を乗り越えられたことである。しかし、それ以来ワイフの米国製品不信は消えず、わが家ではそれ以降、日本車以外に乗ったことがない。わが家「欧米化」の事始めの一コマである。

